

信濃の風土と歴史 ①

# たたかう人びと

— 戦争と平和 —



長野県立歴史館

Nagano Prefectural Museum of History

## はじめに

長野県立歴史館では、長野県の歴史をわかりやすく解説したブックレットを作っています。11冊目となる今回は、『たたかう人びとー戦争と平和ー』と題して、長野県を中心とした戦いの歴史をまとめました。

社会は戦いのない時代から戦いをする時代へと変化しました。弥生時代、小さなクニができ、強いクニが他のクニを従えていくようになりました。そして次第に大きな国へとまとまるようになりました。

古代から信濃は、良い馬の産地として知られました。馬は戦いに必要なものでした。そんななかから武士となっていく人たちがあらわれます。源（木曾）義仲は、木曾で育ち京へ攻めのぼって征夷大将軍になりました。多くの信濃の武士たちは、義仲に従って戦いました。信濃の武士たちは騎馬での弓矢が得意なことで知られました。

戦国時代、信濃は越後（新潟県）の上杉謙信と甲斐（山梨県）の武田信玄による川中島合戦の舞台として有名です。徳川家康が天下統一を目指したとき、最後まで苦しめたのは上田に本拠をもつ真田氏でした。

江戸時代は、大坂の陣のあと大きな戦いはなくなりました。対外的に長い間戦争をせず、全体としては穏やかな時代でした。そんななかでも自分たちの生活を守り向上させるために、一揆や打ちこわしをする民衆もいました。

明治以降、日本は何回も戦争をしています。とくに20世紀前半は、世界を巻き込んだ戦争の時代でした。日本も戦争に参加し、戦争の悲惨さを経験してきました。第二次世界大戦の大きな惨禍の反省から世界平和を願う動きが生まれました。しかし、その後も世界各地で戦争が起きています。そして今、世界の紛争が日本にも大きくかかわることが実感される時代になりました。

学校でも平和学習をおこない成果をあげています。そのような動きも紹介しました。この本を読んで、戦争と平和について改めて考えてほしいと願っています。

# 「たたかう人びとー戦争と平和ー」

## 目次

---

はじめに .....	1
目次 .....	2
信州における馬と戦争 .....	4

---

戦いの始まる前 .....	6
はじめての戦い .....	8
クニどうしの戦いへ .....	10
大王の時代とシナノ .....	12
壬申の乱と信濃の馬 .....	14

---

武士の登場 .....	16
家のために戦う .....	18
守護の追放 .....	20
川中島合戦の裏面 .....	22
平和をつくる .....	24

---

関ヶ原の戦いと信濃 .....	26
治安維持と平和な世の中 .....	28
争いの解決は文書に記して .....	30
幕末動乱の信濃 .....	32
軍備の欧米化と戊辰戦争 .....	34

---

---

新しい軍隊の誕生 .....	36
西南戦争と長野県民 .....	38
日清・日露戦争と県民 .....	40
日中戦争から太平洋戦争へ .....	42
満州開拓団 .....	44

---

戦時下の報道 .....	46
戦後改革と反戦の誓い .....	48
長野県の戦争遺跡マップ .....	50
平和学習の取り組み .....	52

---

参考文献 .....	54
協力者のみなさん・あとがき .....	55
奥付・利用案内 .....	56

---

この本の表記について.....

- ・ 小学校で習う漢字以外は原則としてふりがなをつけました。
  - ・ 資料所蔵者や資料提供者の敬称は省略しました。
  - ・ 旧町村名のあとの（ ）内は現市町村名です。なお市町村名は2005年3月1日現在のものとしました。
-

## 信州における馬と戦争

市川 健夫

縄文人は自然物の採取、狩猟漁労、時期によっては栽培や焼畑耕作で生活しており、他の集落と土地や財産をめぐる戦うことはありませんでした。ところが、弥生時代、水田農業が発達すると、土地と用水の利用をめぐる争うようになりました。また祭りの道具である青銅器や農具をつくる鉄製工具など金属器の材料の奪い合いも、争いの要因になりました。このような対立抗争の結果、優勢な集団が劣勢な集団を支配するようになりました。

長野盆地南部には、千曲市の森將軍塚をはじめ大きな古墳が12基もあります。これらは4世紀末、当地方を支配していた「科野の大王」ともいべき豪族たちが造った古墳です。將軍塚の石室内からは、三角縁神獸鏡が出土しています。これは邪馬台国の女王卑弥呼が魏国からもらった100枚の鏡のうちの1枚が伝えられたという説もあります。

大化の改新後の663年、天智天皇のときに日本軍は唐・新羅の連合軍に朝鮮半島の白村江で戦いました。日本は騎馬兵力・水軍ともに劣勢で敗れました。天皇は騎馬兵力を強化するため、馬政をとりおこなう「馬寮」という役所を設けました。大海人皇子（後の天武天皇）が大友皇子を破った壬申の乱（672年）にあたり、東国の豪族が騎馬軍団を率いて、大

海人皇子を助け勝利を取めたとされています。

平安時代、信濃国はわが国最大の馬産地でした。当時律令政府が管理する牧場の一つに「御牧」がありましたが、甲斐・信濃・上野・武蔵の4か国に設けられた32の御牧のうち、半分の16が信濃国に置かれていました。最大の御牧が蓼科山の中腹から御牧ヶ原台地にかけて広がっていた望月牧で、面積は2000haにも及びました。多くの馬を信濃国で生産できたのは、牧場に転用できる森林原野が広く存在していたこと、また律令国家の支配に忠実な体制に組み込まれていたことがあげられます。馬は4歳まで育てられ、その中で品質のよいものを朝廷に「貢馬」しました。信濃国からの貢馬は80頭で、うち20頭が望月牧からの貢馬でした。

貢馬は左右馬寮の役人が近江国（滋賀県）の逢坂の関まで出迎えましたが、これを「駒迎」といいました。また馬を宮中に貢納する儀式を「駒牽」といい、毎年8月に営まれていました。876年（貞観18）信濃の御牧には2274頭の馬がいました。この頭数は生産に従事する牡馬と牝馬の数で育成中の駒はふくまれていなかったと思われます。朝廷に貢納された馬のほか、中馬は駅馬・伝馬・軍馬に当てられ、下馬は民間に売却されました。

御牧など国立の牧場のほかに、地方の

豪族が所有する「私牧」もありました。

1186年（文治2）の『吾妻鏡』によると、信濃国には、28の御牧があげられています。「延喜式」の御牧のうち埴原牧と山鹿牧が消え、新たに平野などの牧が追加されています。鎌倉時代になると、御牧は名のみになり、望月牧以外貢馬はおこなわれていません。

駒牽については、1392年（明德3）を最後に望月牧からの貢馬もなくなりました。このように信濃国の御牧は、600年の歴史を閉じることになりました。

中世の武士団にとって、最大の軍事力は機動性のある騎馬軍団でした。諏訪氏をはじめ信濃武士が鎌倉時代に活躍するのは、騎射術にたけていたからです。中世の豪族たちは山城を築いて、領土の拡張をめぐる、戦争が繰り返されました。戦国時代を通じて信濃の大部分を支配したのは、強力な騎馬軍団をもった甲斐の武田信玄でした。信濃武士たちの多くは武田・上杉の配下に入り、戦火を交えていました。戦国時代末、鉄砲が日本に伝来してから、戦術が火力中心になり、強力な鉄砲隊をもった織田信長や豊臣秀吉によって天下が統一されました。

1588年（天正16）秀吉による「刀狩り」と「太閤検地」によって「兵農分離」がなされるまで、兵力の中心は農民兵でした。5回にわたる川中島合戦は、麦がとれた晩春のころか、稲の収穫を終えた晩秋のころなどいずれも農閑期におこなわれました。

江戸時代、平和な時代になると、兵力

になる馬の生産・育成などの馬政に対する関心も薄れてきました。江戸時代は平和であったといわれますが、信州でも冷害などで飢饉となり、生活に困った農民が「百姓一揆」を起こしています。これは幕藩体制に対する内戦であるといえましょう。

1871年（明治4）の廃藩置県とともに、明治政府は「国民皆兵」の制度に基づき成年男子に対して兵役の義務を課しました。「富国強兵」のスローガンのもとに、軍備拡張に努めました。日露戦争に当たり、日本の騎馬隊はロシアのコサック騎兵隊に苦戦しました。それは馬格が小さく、機動性も劣っていたからです。戦後の1906年（明治39）日本政府は馬政局を設けて軍馬を意識した馬品種改良に乗り出しました。和種馬（日本在来馬）の牝馬に洋種の種牡馬を交配して、雑種（中半血）の馬を生産しました。その結果、1932年（昭和7）までの26年間で飼育されている馬の9割以上が雑種となり、馬格が大型化しました。

第二次大戦中、機械化が進んだアメリカ軍が陸海軍ともに日本軍を圧倒しましたが、空襲にあって銃後であった日本本土まで戦場となり、大きな被害を受けました。戦後日本の軍隊は武装解除されましたが、1950年（昭和25）の朝鮮戦争勃発とともに日本の再軍備がなされました。

現在の日本は平和ですが、私たちは過去における戦争の過ちを知り、平和な生活を守っていく必要があります。

## 戦いの始まる前



山麓の縄文ムラ（長野県立歴史館常設展示）  
諏訪郡原村阿久遺跡の縄文ムラは、中央に祭り  
や作業に使われた広場がある。その周りに墓や  
住居が同心円（ドーナツ状）のように配置され  
ている。



協力して運び上げられた石（諏訪郡原村阿久遺跡）  
（長野県教育委員会蔵）

大量の石は墓に利用されるとともにドーナツ状に積み上げ  
られている。墓の数は、この村の人口よりもはるかに多い。  
周囲のムラと共同で造られていることがわかる。

### ◇協力して生き抜く時代

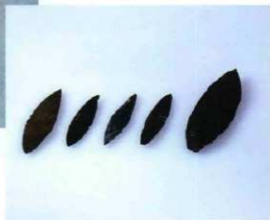
阿久遺跡は約6000年前の、縄文時代  
のムラです。ムラの中に何百万個とい  
う石が置かれています。石はムラのは  
るか下の谷から運び上げ、お祭りの場  
やお墓を造るために使われています。

このムラの人だけでは、これだけ多  
くの石を集められません。まわりのム  
ラの協力が必要です。秋になると大群  
でやってくる魚をつかまえたり家を建  
てる時なども、多くの人びとの協力な  
しにはできません。

協力し合って生き抜くため、お祭り  
などのイベントは団結する気持ちを高  
める役目も果たしていました。まだ戦  
争が始まる前の風景です。



矢じりの刺さった人骨（愛知県伊川津貝塚）  
 （独立行政法人国立科学博物館蔵）  
 今から約3000年前の縄文時代後期末から晩期の貝塚。  
 発掘調査で200体近い埋葬人骨が出土した。その中に尺骨に矢じり（石鏃）が刺さった人骨が含まれる。



狩りに使われた道具1（佐久市下茂内遺跡）  
 （長野県立歴史館蔵）

### ◇いさかいや事故

住まいは家族中心でしたが、集団でくらす毎日です。時にはけんかになったり、食べ物などをめぐる争いも起こります。狩りの最中に誤って仲間を傷つけるようなこともあったでしょう。

縄文人の人骨のなかに、ごくまれに矢の先（矢じり）が刺さっている例があります。何かの力で骨が折れたり砕けているものも見られます。

このような骨は例外で、集団で殺し合うような姿はありません。まだ奪い合うような財産もなく、多くの人を率いる王のような権力者も出てこない時代です。小さな争いごとを解決しながら、みんなで力を合わせて生き抜いているのです。（百瀬新治）



狩りに使われた道具2（原村磨沢尾根遺跡）  
 （長野県教育委員会蔵）  
 道具である石器による人体損傷の例としては、頭部に石斧による打撃痕が認められる人骨がある。しかし、この時代の道具は武器として作られたものではない。



# はじめての戦い



溝で囲まれたムラ（長野市篠ノ井遺跡） イラスト



深い溝（塩尻市上木戸遺跡）  
（長野県教育委員会蔵）



まもりの杭列（愛知県朝日遺跡）  
（財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター提供）

ムラの外に向け杭列を埋め立てたりバリケードをつくるなど防衛の工夫がされている。

## ◇ムラをめぐる戦い

稲作が始まった弥生時代、県内各地にまわりを濠でかこったムラが出現します。外からの敵を防ぐ目的で、深くけわしい溝を掘りめぐらしました。集団で戦う戦争が始まったのです。

稲作開始と同時に、土地や水を奪い合いたくわえた食糧を手に入れようとする戦いが起こりました。ムラなど大きな集団で農業がおこなわれ、集団を指導するリーダーが登場しました。より広い土地と多くの財産をめぐる、ムラとムラとの戦いです。

小高い場所にムラをつくり、二重三重の溝（堀）で守ります。先をとがらせた杭を埋めたり、バリケードをつくる工夫をしています。人びとの間には緊張感があふれていました。



武器を身に付けた兵士（イラスト）  
木でできた鎧や盾で身をまもり鉄や石の武器をもつ戦士の姿。

#### ◇戦うための道具

戦いが始まると同時に、その道具である武器もつくられます。それまで狩りにだけ使われていた石鏃（矢じり）は、先が鋭く、大きく重くなります。人を傷つけ殺すための道具に変化していったのです。

武器の多くは、金属の道具としてつくられ、日本列島に持ち込まれました。それをもとに、金属の武器をまねて、石をみがき、同じ形の武器をつくったりしています。

しかし、大きな戦いは、当時の先進地である九州などが中心で、東に位置する長野県内では激しい戦いはなかったようです。遺跡の調査で出てくる武器の数が少ないことなどから、平和にくらす姿も浮かんできます。

（百瀬新治）



きらびやかな木製盾  
（複製 長野市水内坐一元神社遺跡）  
（長野市立博物館蔵）

はなやかに彩られた盾は、戦闘よりも儀式などで権威の象徴として使われた。

## クニどうしの戦いへ

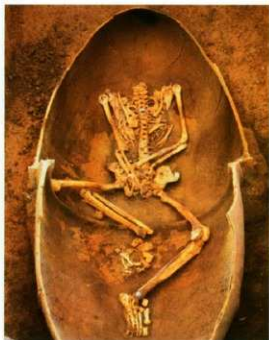


復元された王の住むムラ（佐賀県吉野ヶ里遺跡）

（佐賀県教育委員会提供）

北部九州において王の住む拠点的なムラの姿が具体的に明らかになった。

発掘の成果をもとに、建物などを含め復元整備が進められている。



首のない人骨（佐賀県吉野ヶ里遺跡）

（佐賀県教育委員会提供）

埴棺に葬られたこの人骨は首から上がない。戦いで首を失った戦士の墓であったのだろうか。

### ◇倭国大いに乱れる

弥生時代の日本について、中国の本には「倭国大いに乱れる」と書かれています。日本はたくさんのクニに分かれて、クニとクニが激しく戦う戦争の時代をむかえます。

佐賀県吉野ヶ里遺跡は、当時のあるクニの中心のムラで、王が住んでいたと考えられています。戦争を考えたムラのつくり方から、戦乱の厳しさが伝わってきます。

兵隊（戦士）のなかには傷つき命を落とす者も少なくありませんでした。お墓の中に残る人骨には、実際に首がなかったり剣や矢が刺さっているものも数多くあります。戦士以外にも、戦争の被害を受ける人がたくさんいたことが想像できます。



大量の武器（銅剣）（鳥根県荒神谷遺跡）  
（鳥根県教育委員会提供）



大量の武器（銅矛と銅鐔）（鳥根県荒神谷遺跡）  
（鳥根県教育委員会提供）

写真の大型銅矛16本をはじめ銅剣358本など多量の武器が発掘された。いずれも祭器としてつくられ埋められた。

### ◇殺し合いの結果

激しい戦いの結果、勝利したクニは破れたクニを合わせて、より大きく強く豊かなクニに成長します。大きなクニの王は、さらに強力な兵隊と大量の武器でまわりのクニを従えます。長野県でも、自分の力を示す大きな墓の存在から、クニができたことがわかります。それまでに多くの血が流れたことでしょう。

弥生時代末の倭国は、女王卑弥呼が支配する邪馬台国を中心とした連合国家ができてつづきました。戦いに疲れた人びとが平和を望んだのでしょうか。しかし、戦争はそれで終わりませんでした。卑弥呼の死とともに、つかの間の平和が破れさらに戦いが続きました。  
（百瀬新治）



有力者の墓（飯田市森田遺跡）  
（飯田市教育委員会提供）

古墳に近い形状の方形台上墓などには、新たに登場した有力者が葬られた。

# 大王の時代とシナノ



千曲市森將軍塚古墳

(千曲市教育委員会提供)

歴史館近くの森將軍塚古墳は全長98mの墳丘をもつ県内で一番大きなものである。古墳の主は4世紀半ばこの地域を治めた有力者である。ヤマト政権と深いつながりをもっていたことが、三角縁神獣鏡などの副葬品から推測される。



長野市篠ノ井川柳將軍塚古墳出土品 (複製 布制神社蔵)  
長野盆地南部の千曲川沿岸の尾根上には大きな前方後円墳がある。川柳將軍塚古墳は全長93mの前方後円墳である。

## ◇争乱から統一へ、前方後円墳の出現

3世紀後半ころに有力者たちが協力してつくったヤマト政権が、奈良盆地に成立しました。ヤマト政権の大王は鍵穴の形をした大きな墓(前方後円墳)をつくりました。

ヤマト政権は、銅鏡やヒスイの勾玉などを政権に従った各地の有力者に分けあたえました。各地の有力者たちも前方後円墳をつくるようになりました。千曲市にある森將軍塚古墳に埋められた人も有力者の一人です。

5世紀後半に入ると、前方後円墳は下伊那地方などにたくさんつくられます。この時期の古墳の主たちは、甲冑や刀などをもち武人的な性格を強めたことが、古墳の副葬品から読み取れます。



飯田市妙前大塚古墳厩庇付冑

(複製 飯田市教育委員会蔵)

飯田市鑑塚古墳短甲

(複製 開善寺蔵)

5世紀後半には、ヤマト政権のもとで武器づくりの技術集団が組織され、武器を集中管理し、地方の大豪族たちにあたえて、政権維持に利用した。写真の冑なども、実践向きでなく、権威を示すものと考えられる。

轡は、馬の口にかませ、手柄を引いて人間の意思を伝えるもっとも重要な制御の道具である。鞍と轡は馬に乗るための道具である。鞍は馬の背に固定して騎手の体を安定させる道具で、古墳時代の鞍は木製で、轡は馬に乗るときの足がかりになり、乗馬中の体の安全を保つ。古墳時代には足をかける部分が輪になっている輪轡と、足先の覆いがついた香轡の二種がある。



長野市覆田遺跡木製馬具（鞍、轡）  
（長野県立歴史館蔵）



長野市松原1号墳馬具（轡、鞍金具）  
（長野県立歴史館蔵）

#### 須坂市鐘塚古墳飾り金具

（複製 須坂市教育委員会蔵）

青銅製。中央に獅子の文様があり、縁には波状と列点の文様がつけられている。韓国公州宋山里2号墳の出土品と似ている。



#### ◇有力な馬産地、シナノ

古墳時代になると、朝鮮半島との交流が深まり、新しい文化がもたらされました。馬の飼育と乗馬の技術は代表的なものです。5世紀後半には国産の馬具もつくられるようになりました。

シナノは、馬に乗るための鞍や轡、轡、馬の飾り金具などの馬具を副葬した古墳の比率が全国一高く、有力な馬の産地と考えられています。

下伊那地方に集中していた馬具を副葬する古墳は、6世紀後半以降、県内各地に広がります。また直径20m未満の中・小型の円形古墳にも馬具が副葬されるようになりました。古墳の主たちは、騎馬兵力としてヤマト政権を支えました。

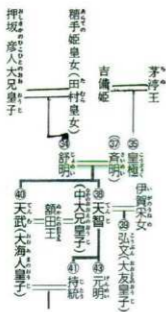
（岡村秀雄）

松本市桜ヶ丘古墳天冠  
（複製複製 松本市教育委員会蔵）  
飾り金具と同じく縁に波状と列点がつけられています。  
金メッキ製。



長野市大室古墳群合掌型石室  
石室の天井を屋根型に組んだ形の古墳のものは、朝鮮半島とされている。馬生産とかわる渡来人の墓として注目される。

# 壬申の乱と信濃の馬



皇位と系図

## 皇位と系図

飛鳥時代の天皇家では、皇位継承をめくり、親族間で争いが繰り返されてきた。

長野県内の古代の牧  
 (『長野県史』より転載)  
 信濃には16の御牧が置かれた。信濃の御牧は最も早く成立し、遅くまで駒牽が続けられた。



## ◆壬申の乱

天智天皇の死後672年に、大海人皇子と大友皇子が皇位継承をめくり争いました。

大海人皇子は地方の豪族を味方につけ戦いに勝利しました。

地方豪族の主力は東国の騎馬軍団で、その中でも騎馬に練達した科野兵は最も頼みとするところだったともいわれています。科野兵の奮闘は勝敗を決める大きな力となったといえるかもしれません。



## 馬の墓と馬具 (新井原遺跡)

馬葬と副葬された馬具は、特に下伊那地方に数多く存在する。5世紀から7世紀にかけて、当地に前方後円墳が集中し、馬や装飾馬具などを身につけた馬の墓が出土していることから、ヤマト政権と強く結びついていたことが分かる。(飯田市教育委員会 提供)

壬申の乱で勝利した大海人皇子は翌年天武天皇として即位しました。

壬申の乱の結果、大友皇子に味方した中央豪族が没落しました。これにより天皇の政治指導権が強まり律令体制の整備が進めやすくなりました。

政府は各地に牧場を設け、馬の飼育をさせました。信濃、甲斐、武蔵、上野の4か国に御牧32牧を置き、馬の生産にあたらせました。

#### ◇信濃の馬

信濃では、古墳時代から馬の飼育が盛んにおこなわれていました。山がちな自然地形を利用でき、飲み水や牧草を豊富に得ることができたからです。

律令政府が設けた信濃の御牧からは、都に優秀な馬を1年に80頭も献上していました。馬は、京に向けて運ばれ、「駒迎」や「駒牽」の儀式がおこなわれました。「駒迎」は到着する駒を迎える式、「駒牽」は献上された馬を天皇が御覧になる式です。「駒牽」ははじめは8月15日（望月の牧は8月23日）におこなわれましたが、後に16日に改められました。特に、望月の牧は信濃最大の牧で、年に20頭もの貢馬を送り出していました。

鎌倉時代になると、信濃の御牧は武士の私有地になりました。馬を献上したのは望月の牧だけになりました。その望月の牧も1392年（明徳3）を最後に「駒牽」の記録がなくなります。

（春原邦江）



「野馬跡跡」(東御市)

(福島邦男提供)

信濃の各地には牧関係の地名が残っている。現在、御牧ヶ原台地には野馬跡と呼ばれる堀と土塁の遺構が存在する。外に出ようとする馬を柵でくいとめ、馬が柵の外に逃げ出して民に迷惑がかからないようにしていた。

#### 合唱組曲



企画・構成 宮下宮由  
作 詩 大川悦生  
宮沢 肇  
作 曲 三木 聡

#### 合唱組曲 望月の駒

かつて、多くの名馬を産出し、馬との結びつきが強かった地域の人びとの心の中には、役に立つ馬を飼育してきたということが誇りとなって生き続けている。「生駒姫」の民話や物語が生まれ、1994年（平成6）には、合唱組曲「望月の駒」が作詞・作曲され、各地で上演、感動を呼んだ。



## 武士の登場



保元の乱 (保元合戦図屏風 馬の博物館蔵)  
源平の合戦のはじまりといわれるこの戦いに、信濃から  
天皇家の警護にでむいたものもいた。写真左側には屋敷  
のなかでふるえる貴族たちがいる。



埋められた経筒  
(東京国立博物館蔵)  
北日名遺跡(坂城町)で  
みつけた経筒には  
1157年(保元2)の年  
号が入っている。この地  
を支配した村上一族が保  
元の乱のあと、一族の安全  
を祈ってお経を埋めた  
可能性もある。



### ◇雇われた信濃の武士

1156年(保元元)、京の都で後  
白河天皇と崇徳上皇の兄弟が争いを起  
こします(保元の乱)。双方はそれぞ  
れの御所を警備するために武力をも  
った人びとを雇いました。信濃国埴科郡  
に勢力をもった村上為国・基国父子  
は、崇徳上皇の家来として戦いに参加  
しています。

佐久郡の海野氏や望月氏などは後白  
河天皇の側について戦っています。信  
濃から出兵した人たちの多くも後白河  
天皇に味方しています。彼らは古代の  
牧場を足場にして発展してきました。  
馬の調教や乗馬に優れていました。武  
士は戦闘能力や乗馬技術に優れ、戦う  
ことを仕事とした集団でした。平安時  
代の終わりごろ、そうした技術をみこ  
まれ、天皇や貴族の警護のために戦  
った人びとが、やがて武士の名を高め  
ていくのです。



船上の扇を射る那須与一  
 (平家物語四屏風 長野県立歴史館蔵)  
 扇を射た与一は挿辻(松本市)などの地頭になった。

流鏝馬(駿射犬追物四屏風 長野県立歴史館蔵)  
 走る馬からのめをめがけて矢を射る。

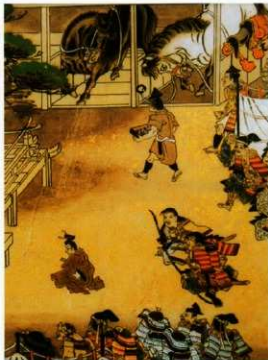
### ◇武士の技と芸

鎌倉時代の歌人藤原定家は「信濃国の武士は屈強で、国司のことを聞かない」と日記に記しています。都でも信濃武士の勇猛さはよく知られていました。

武士は將軍の前で美しく力強く弓矢や乗馬を披露しなければなりません。「吾妻鏡」という歴史書には信濃の武士のこともたくさんかかれています。なかでも流鏝馬やぶら下げた笠をめがけて弓を射る笠懸などが上手な信濃武士が何度も顔を出します。桜井五郎という佐久の武士は鷹を飼い慣らす鷹匠で、その技を源頼朝にほめられています。諏訪の金刺盛澄という武士は木曾義仲に味方したのでとらえられますが、頼朝の前で見事な流鏝馬をおこなったので無罪となったというエピソードもあります。

武士は「芸能人」でもあったのです。

(村石正行)



人質になった木曾義高  
 (木曾義仲合戦四屏風 長野県立歴史館蔵)  
 平氏を倒すため挙兵した木曾義仲は、おなじ源氏の源頼朝と争うのをさげ子どもの義高を頼朝のもとに人質としてあずけた。人質は戦いをさける手段だった。義高の脇に佐久郡の武士望月・海野氏がひかえる。

## 家のために戦う



赤木家の赤章威大鎧（国宝・岡山県立博物館蔵）  
信濃から備中に移った赤木家に伝わったものである。  
源平の戦いのころ、実際に着用したと考えられる。



東御市岡羽神社の石籠（東御市教育委員会提供）  
石籠とは石の屑子（ずし・仏像などを納める箱状のもの）の  
こと。

### ◇鎌倉武士の「転勤」

鎌倉時代に信濃国筑摩郡赤木郷（松本市）に住んでいた赤木氏は、1221年（承久3）、承久の乱の手柄により、備中国穴田郷（岡山県高梁市）の地頭に任命され、引越していきました。

赤木氏は家のために鎌倉方に味方をして戦い、新たな土地を得たのですが、信濃の土地をこれまでどおり所有していました。鎌倉時代の武士は、遠く離れた地域の土地を同時に管理・運営することがありました。

### ◇戦勝を祈る

東御市の岡羽神社には、鎌倉時代の「正慶二（1333）年三月廿八日」という日付が刻まれた石籠があります。祖先をまつている氏神に、東信濃の滋野一族である海野、望月、矢沢、根津（祢津）氏が戦いで手柄をたてられるようにと願いをこめて、奉納したものです。

石籠が作られた正慶2年は鎌倉幕府が滅ぼされた年です。1331年（元弘元）後醍醐



市河文書「中野家平着到状」 (重要文化財 財団法人本間美術館蔵)  
 市河文書は奥信濃・志久見郷を本拠にした市河家が所蔵した平安時代末期から戦国時代末期までの文書。なお1333年を、鎌倉幕府方では正慶2年、後醍醐天皇方は元弘3年とそれぞれ違った年号で呼ぶ。中野家中は足利高氏のサインをもらった。

天皇らが倒幕を企てました。この企てに加わり楠木、赤松氏らが京の周辺で挙兵しました。1333年3月赤松氏は京都の六波羅軍（鎌倉幕府方）を破りました。幕府は足利高氏（尊氏）らを大将とする討伐軍を京都に派遣しました。石倉は滋野一族が、その存亡をかけ京の戦場に向かう直前に、願いをこめて氏神に奉納されたもののようです。

#### ◆一族の土地と安全をまもる

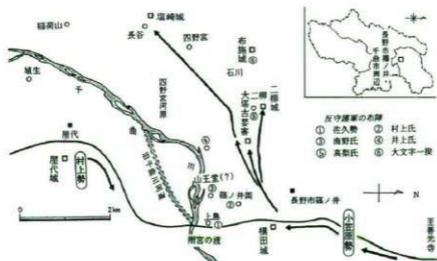
足利高氏は後醍醐天皇方を討伐するように幕府に命じられ京に進軍しました。京都に向かった高氏は後醍醐天皇方に味方し、六波羅探題を攻めます。

北信濃の市河一族の武士中野家平は、高氏の六波羅攻めに従いました。1333年（元弘3）5月8日、高氏に着到状を提出し、証明してもらっています。着到状は、出陣した時、軍勢にいち早く馳せ参じ加わったことを記して提出した文書です。これを受け取った大将や軍奉行は、承認の言葉と花押（サイン）を加えて返却しました。文書は残っていませんが、石倉を奉納した滋野一族も着到状を提出し、同様の証明を受けたのでしょうか。

着到状は、後日の恩賞（褒美）の証拠になり、一族の土地や安全をまもるものとして大切にされました。

（川崎 保）

# 守護の追放



大塔合戦関係図（『長野県史』通史編3より作成）



大文字一揆の旗（復原模造 長野県立歴史館蔵）  
千曲川・犀川流域の武士たちはこの旗印をシンボルとして  
団結し、守護と戦った。

## ◇不人気の守護がきた

1399年（応永6）、室町幕府が小笠原長秀を信濃の守護に任命しました。長秀は信濃の守護の家に生まれましたが、信濃の武士たちとの関係が悪く、父長基について京都に住んでいました。長秀は室町幕府に信濃の守護就任を何度も願い、ようやく願いがかなったのです。

1400年、長秀は信濃に入り、8月には善光寺（という町）で、信濃守護としての仕事をはじめました。長秀がまず最初におこなったのは、守護の権限を利用した年貢の取り立てでした。事件は、埴科郡の村上満信の所領で起きました。年貢の徴収に来た長秀の使いを村上氏の家来が切ってしまいました。



横田城（長野市篠ノ井会）

善光寺から進軍した長秀軍が最初に陣をしいた場所と考えられている。

### ◇飢えに苦しんだ戦い

長秀は満信を役所に呼び出そうとしますが応じません。「けしからん。満信を討て！」と長秀が命令しました。当時村上氏を含めた、千曲川・犀川流域の武士たちは組合をつくっていました。大文字一揆といいます。一揆に入っている武士たちが村上氏の応援をしました。守護の軍は南信の小笠原一族が中心でした。軍勢の数は大文字一揆が圧倒的に勝っていました。

川中島付近で衝突した両軍ですが、あっという間に守護軍は総崩れになりました。守護軍は塩崎城目指して逃げました。一部の兵は逃げ切れず大塔の古要害に逃げ込みました。食料の準備もない古城。周りを囲まれた兵は飢えに苦しみ城から打って出、戦死・自害者を多数出しました。塩崎城に逃げ込んだ小笠原長秀も、城を囲まれ降伏し、すぐごと京へ逃げ帰りました。

（郷道哲章）



二つ柳城（長野市篠ノ井二ツ柳）

逃げ遅れた守護軍の一部が立てこもった大塔古要害と推定されている城の一つ。



塩崎城（長野市篠ノ井塩崎）

長秀軍が逃げ込んだ城。一揆軍に囲まれ降伏した。長谷川の裏山になる。

- 大文字一揆（犀川流域）  
宮高氏・西牧氏・窪寺氏・春日氏・  
落合氏・香坂氏・小田切氏
- 村上満信（埴科郡）
- 柿津遠光（小県郡）
- 海野幸義（小県郡）
- 高梨友尊（高井郡）
- 井上光頼（高井郡）
- 高村良忠（木内郡）
- 仁科盛房（安曇郡）
- 諏訪一族の神家（諏訪郡）
- 佐久勢（佐久郡）

守護と戦った代表的な武士とその証拠地

# 川中島合戦の裏面



妻女山から見た川中古古戦場

千曲川と犀川にはさまれた川中島で戦いは、おこなわれた。9月10日は太陽麗になると10月後半にあたる。川霧が発生しやすい季節である。



上杉・武田両軍進撃図



首塚（八幡原史跡公園）

合戦後、武田方の海津城将高弾正が敵味方の別なく、戦死者6000人の遺体をこの塚に手あつく葬った。感慟した謙信は、後年糧不足に悩む武田氏に糧を送り、この恩にむくいたという。



謙信と信玄の一騎討ちの像（八幡原史跡公園）

## ◇川中島合戦

信濃を支配しようとする甲斐（山梨県）の武田信玄と、それを阻止しようとする越後（新潟県）の上杉謙信が、川中島（長野市）で5回にわたって戦いました。

このうち、もっとも激しかったのは、1561年（永禄4）9月10日の第4回目の戦いでした。謙信は、善光寺に5000人を残し、1万3000人を率いて妻女山に陣をききました。一方、信玄は2万人を率いて、茶臼山（長野市篠ノ井）から海津（松代）城に入りました。

この日の未明、武田軍の別働隊1万2000人が妻女山を攻撃し、本隊8000人は驚いて下りてきた上杉軍を八幡原ではさみ討ちにしようしました。

ところが謙信は、この作戦に気づいていました。上杉軍は前日の午後10時ごろに妻女山を下り、雨宮（千曲市）で千曲川を渡って八幡原で夜が明けるのを待ちました。



川中島合戦絵 (大日方英雄寄託) 江戸時代の作

### ◇合戦史上、最大の激戦

当日、川中島は深い霧におおわれていました。このため、両軍は八幡原でたがいに接近していたことを知りませんでした。午前7時ごろ、霧が晴れると武田軍の本隊と上杉軍が鉢あわせとなり、激しい戦闘になりました。

はじめは、数でまさる上杉軍が優勢でしたが、妻女山へ向かった武田軍の別働隊が合流すると、上杉軍は善光寺へ退却しました。

川中島合戦では、上杉軍が死者3470人、負傷者は9400人(死傷率72%)。武田軍の死者は4630人、負傷者7500人(同61%)と伝えられています。

日本の戦史上、死傷率が高かったのは、1939年(昭和14)のノモンハン事件(76%)、1942年(昭和17)のガダルカナル島奪回戦(66%)です。関ヶ原の戦いでも、死傷率は10%にもなりません。この数字から川中島合戦が、いかに激戦だったかがわかります。

(酒井健次)



川中島合戦図屏風 (長野県立歴史館蔵)  
江戸時代後期の作。武田方の『甲陽軍鑑』にもとづいて描かれている。謙信が降りおろした太刀を信玄が軍配で受けとめる。もっとも知られた構図。



川中島合戦図屏風 (和歌山県立博物館蔵)  
江戸時代前期の作。上杉方の『北越軍記』にもとづいて描かれている。謙信と信玄が御勢川の中に馬を乗り入れ、互いに太刀で戦っている。『北越軍記』では、一騎討ちがあったのは1554年(天文22)の合戦としている。



# 平和をつくる



現在の西岸寺



現在の高遠城の太鼓槽（高遠町観光協会提供）



織田信長（1534～1582）（大本山本能寺蔵）  
1582年武田勝頼を滅ぼした信長は信濃の大部分を支配した。

## ◇織田信長の侵攻

1582年（天正10）2月、天下統一をめざす織田信長は甲斐（山梨県）の武田勝頼を攻めました。長男信忠を大将とした軍勢は木曾谷から伊那谷へはいり武田軍の拠点を攻撃しました。このひとつ飯嶋城（飯島町）の外郭にあった西岸寺（飯島町）は信長軍に攻撃され、ほとんどが焼けてしまいました。戦国時代の寺院は武士の館としての役割もあったのです。

飯嶋城の落城後、飯嶋氏は勝頼の弟仁科盛信の守る高遠城に逃れ、盛信とともに討ち死にしました。信長は諏訪を経由し甲斐に攻め込みました。勝頼は自殺し、武田氏は滅亡しました。

## ◇住民たちのうごき

3月19日、信長は信濃支配を定めるため上諏訪の法華寺にやってきて信濃を家臣5人に分け与えることにしました。



### 信長の禁制

(穂高町満願寺藏)

信長は自分のはんこ(「天下布武」)を押して権利を保障する内容の証文を大量に発行した。写真は安曇郡満願寺の備が信長からもらったもの。

安曇郡吉野郷(三郷村)の村人など各地の村の代表者や僧が信長のもとに殺到しました。戦争中、兵たちが統率をみだして村や寺を燃やしたり、品物を奪うことがありました。彼らは建物や財産を守るため信長のところへ来たのです。信長は禁制という保障の証文を彼らに与えました。こうして人びとは地域の平和を自分たちの力で獲得したのです。

### ◆森長可と一向宗の寺

4月になり信長の支配に反発した一部の一向宗門徒の一揆が起こります(芋川一揆)。信長の家臣森長可は徹底的にこれを弾圧し数千人が殺されます。いっぽう、同じ一向宗の康榮寺(長野市)や勝善寺(須坂市)などの僧は、長可のもとを訪れ禁制をもらいました。一揆に対する攻撃が自分たちへ波及しないよう、事前に防ごうとした知恵でした。

(村石正行)



森長可(1558~1584)

(岐阜県可成寺藏)

信長の家臣。鬼の勝蔵と異名を取る武士で武田攻めで活躍した。水内・高井・更科・埴科の川中島4郡を与えられる。

## 関ヶ原の戦いと信濃



1932年（昭和7）ごろの上田城（『図説・上田の歴史』より転載）築城当時は崖下を千曲川が流れていた。

### ◇関ヶ原の戦いと各地における戦闘

豊臣秀吉が亡くなった後、権力を増大しつつあった徳川家康と、豊臣氏の政権を守ろうとする石田三成が対立し、関ヶ原（岐阜県）で決戦をしました。

これに先立ち、九州・北陸・東北では両軍に分かれて戦闘が起きました。信濃でも重要な合戦が上田でありました。

### ◇上田城の攻防

1600年（慶長5）9月、徳川軍は二手にわかれ、徳川家康の本隊は東海道をのぼり、徳川秀忠（後の二代将軍）に率いられた3万8000人余の軍勢は、信濃を通して京都を目指しました。途中、徳川家康へ反旗をひるがえし、長男の真田信之と袂を分かち、上田城に



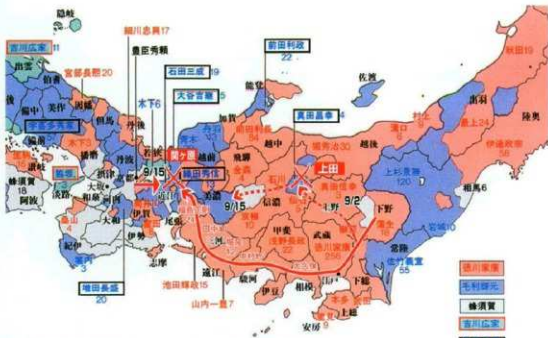
真田昌幸像

（原昌義蔵）



真田信繁（幸村）像

（原昌義蔵）



関ヶ原の戦いにおける徳川軍の動きと関東・中部・近畿地方の大名配置  
 関東・中部地方の大半は徳川方（東軍）であり、上田城の真田軍は孤立していた。

たてこもる真田昌幸・信繁（幸村）父子を攻めることになりました。

ところが守兵わずかに2、3000人の真田軍は、秀忠の率いる徳川軍を信濃の地にきぎ付けにし、関ヶ原の戦いへの参加を阻止するという大きな役割を果たしました。

#### ◇各地における戦闘の終息

関ヶ原の戦いが徳川家康の勝利に終わったことが伝わると、九州・北陸・東北で起こっていた戦闘は終息しました。

「天下分け目の戦い」といわれるこの戦いは、徳川家康に天下をもたらしたという以上に、その後260年間余の平和を日本にもたらすという、重要な意味をもちました。

（寺島正友）



関ヶ原合戦絵巻

（松代文化財施設等管理事務所 真田宝物館蔵）  
 真田軍と秀忠軍の対戦の様子が描かれている。



真田父子上田陣城図

（上田市立博物館蔵）

## 治安維持と平和な世の中



松本城下町絵図部分

(長野県立歴史館蔵)

### ◇城下町の形成

近世の城下町は、織田信長・豊臣秀吉の時代にかたちづけられました。城には、天守閣が造られ、城のまわりに町が造られました。17世紀の半ばごろには、武家の居住地を取り囲むように職人・商人の町も造られるようになり、町人町を形成するに至ります。

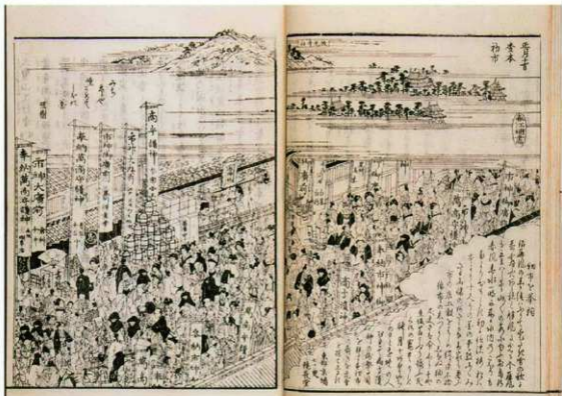
松本城の城下町は、街道を運ばれた物資の中核地として発展しました。とくに北国西往還（善光寺街道）周辺に町人町が集中し、1日延べ1000駄の荷物が入り出したといわれ、商業の中心地となりました。城下町の入り口には木戸が設けられ、町と村をわけました。木戸では出入りする人も監視される対



松本城下町絵図部分

(長野県立歴史館蔵)

城下町入口にあたる博労町をはじめ、いくつもの木戸が設けられた。



松本初市『善光寺道名所図会』  
 (1849年(嘉永2)刊 豊田利忠作)(長野県立歴史館蔵)  
 天保期、松本の初市で賑わう風景を描く。

象で、また決まった時刻に開閉され、  
 城下町の治安が保たれました。

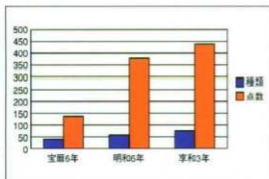
#### ◇衣装にみる統制と自治

江戸時代、松本藩などでは郡奉行と  
 村役人の間に大庄屋という役人を置き  
 ました。富裕な農民から選ばれ代だい  
 世襲することが多かったようです。松  
 本藩の大庄屋であった清水家は、北安  
 曇郡松川村から大町市常盤までの松川  
 組を管轄しました。清水家に伝わる火  
 事装束は、町火消などに使った機能的  
 なものと異なり、装飾的な威儀服です。  
 警備や警護のために着用したもので  
 す。このような火事装束を身に付ける  
 人は限られていました。大庄屋は、地  
 域の治安を守る役割も果たしていたの  
 です。(伊藤友久)



火事装束 (長野県立歴史館蔵)  
 武装が、全般的に機能的な作業服から装飾的な威儀服とな  
 り、形式化する。

# 争いの解決は文書に記して



村役人の引き継ぎ文書の増加

(佐久郡平林村(佐久町)文書より作成)

この村では年をおごとに文書の量が増えた。量ばかりでなく種類も増えた。



村の文書

(長野県立歴史館蔵)

更級郡鹿谷村(信州新町)の文書。村の運営には多くの書きつけが必要だった。

## ◇文書の増加

近世の後期になると、多くの人たちが寺子屋などで学習をつみ文字を読めるようになりました。そして村むらで作られる文書が急激に増えていきました。幕府や藩からの命令は、文書をとおして村に伝えられます。村役人にとって、文書の内容を村人に知らせ、書き写して保存しておくことが重要な仕事の一つでした。

村人の側でも自分たちを守るために、文書を書いたり読んだりすることが必要になってきました。村役人などの不正を追及するのにも、読み書きや計算の能力がものをいいました。

読み書きの能力は、文化の面で使われ、俳句や和歌などを親しむ人も増えていきました。豊かで多様な趣味を楽しめたことは安定した時代だった証拠です。



さまざまな寺子屋手本

(長野県立歴史館蔵)

手紙の書き方をまとめた「庶民往来」や村の名前を記した「村名尽」などが手本として用いられた。



寺子屋の机

(長野県立歴史館蔵)



諏訪・高遠入会山論裁許絵図(1708年 宝永5年)  
(長野県立歴史館蔵)

#### ◇争いの解決のために

山林や用水は、いくつかの村で共同利用するのが一般的でした。人びとの活動が活発になると、村同士で境界や権利の争いを起こすことがありました。

争いが起きると、おたがいの言い分を文書にして提出して解決をめざします。多くの場合、近くの村役人や寺社が中に入って解決しましたが、時には江戸へ訴え出て幕府に判断をゆだねることもありました。決定事項は文書や絵図に記し、村むらで確認しました。

新たな争論のときも、文書になって残っている以前の取り決めが証拠となります。そのために村では大切に文書を保管しました。

(市川包雄)

村の争いの中で最も多いのは、山林の境界争いや用水の権利争いである。1705年(宝永2)諏訪12か村と高遠6か村の間で山の入会をめぐる争いが起こり、幕府にまで持ち込まれた。村むらは、判決にもとづき裁許の絵図を作った。山の尾根や沢、道、村名などを色分けして書き、入会の範囲を明確に決めた。



村の保管庫・郷蔵

佐久郡平林村の郷蔵である。江戸時代に建てられ、村の文書も保管した。現在でも定期的に虫干しがおこなわれている。また諏訪郡乙事村(富士見町)では、1813年(文化10)年貢米の保管の蔵と別に文書蔵を建てた。「半紙一行の書き付けでも千金にかえがたい」と、当時の村人たちは考えていた。



# 幕末動乱の信濃



村方騒動の件数〔長野県史〕第6巻近世3  
北信4郡（更級、埴科、水内、高井郡）のものである。東信、中信、南信でも同じ傾向にあると考えられる。



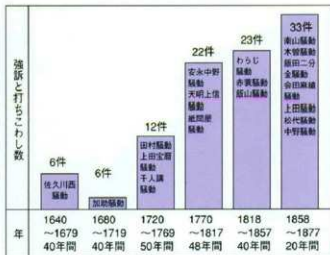
佐久郡下海瀬村（佐久町）の入札帳  
（複製 長野県立歴史館蔵 国文学研究資料館史料館原史料）

## ◇力による農民の争い

江戸時代の中ごろになると、村の中は富裕な農民とそうでない農民（小前百姓）とにわかれ、村方（小前）騒動が起きました。

小前百姓の訴えで、村役人は世襲ではなく交代で勤める村、さらに進んで入札（投票）で決める村も出てきます。

幕末になるにしたがって、さまざまな負担が増えていきます。豊かでない小前百姓は負担をへらすようと要求をします。村役人へ訴えても埒があかないと、藩や代官所（陣屋）へ直接訴えました。ときには打ちこわしや百姓一揆になることもありました。



#### 信濃国に起きた百姓一揆の件数

一揆には逃散や越訴・越訴などもあるが、強訴と打ちこわしの表である。

#### ◇世直しの動き

1853年（嘉永6）ペリーの来航をきっかけにして、徳川幕府の力が衰え、政治が不安定になり、世直しの動きが出てきました。外国との貿易がはじまると、米などの物の値段が上がりました。

伊那郡南山郷36か村（飯田市、泰草村）は、1859年（安政6）負担の増加に反対して百姓一揆を起こしました。1865年（慶応元）5月に、飯田城下の借家人などが米の安売りを求めて、米商人のところへ押しかけました（打ちこわし）。翌年には、木曾の人びとが松本平へ出てきて、米商人を打ちこわす「木曾騷動」が起きました。

1867年（慶応3）9月下旬に、飯田城下にお札が降りました。世直しの期待と不安が広まり、「ええじゃないか」とはやしながらお酒を飲み、踊り大騒ぎをすることをしています。お札降りは木曾、塩尻や松本、長野盆地や上田地方におよんでいます。

（大橋昌人）



宗吾大明神の祠（飯田市今田）

一揆の指導者の今田村の小木曾孫兵衛は地元の大願寺へ「世直し大明神」といわれる佐倉惣五郎をまつた。

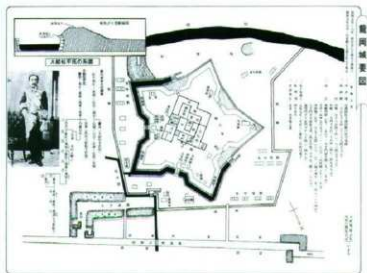


ええじゃないか降札

（複製 長野県立歴史館蔵 竹入潔原史料）

お札は伊勢神宮だけでなく、豊川稲荷大明神・秋葉大権現などいろいろあった。

# 軍備の欧米化と戊辰戦争



龍岡城要図

(臼田町教育委員会作成リーフレット「龍岡城五稜郭」より転載)



龍岡城中心部の航空写真 (株式会社スカイワールド提供)



お台所の建物 唯一残る龍岡城の建物

## ◇信州の五稜郭

開国により、欧米諸国の近代化された軍隊組織や装備などの知識が日本にもたらされました。この近代的な軍備に驚いた幕府や諸藩は、軍事（組織など）の改革をおこないました。

防ぎよ施設では、鉄砲や大砲を使った戦いに重点をおいた五稜郭という星型の城がつけられました。臼田町の龍岡城は、松平乗謨が本拠地を三河（愛知県）から信州佐久に移した際に築いた五稜郭です。1861年（文久3）幕府から移転と新陣屋建設の許可があり、1864年（元治元）工事にとりかかり、1867年（慶応3）未完成のまま工事を終了しました。龍岡城のほかには、幕府によって函館（函館市）に五稜郭がつくられ、戊辰戦争最後の函館戦争の舞台となりました。

## ◇戊辰戦争

1868～69年（慶応4＝明治元～2）に各地で起こった、明治新政府軍と旧幕府支持勢力との戦いを戊辰戦争といいます。

信州では、飯山（飯山市）で戦いがありました（飯山戦争）。1868年（慶応4）4月25日、旧幕府軍の一派が越後（新潟県）から峠を越えて飯山城下に入りました。これを松代藩が主力の新政府軍が撃破しました。この戦いでは、佐久間象山以来の松代藩の大砲と砲術が威力を発揮しました。

戊辰戦争の勝敗を決めたのは、両軍の使用した洋式銃と大砲の性能の違いでした。旧幕府軍の銃の主流は、先込め型の旧式なものでした。また、火縄銃もありました。いっぽう新政府軍の銃は、最初は先込め型でしたが次第に新式の元込め型に代わりました。薩摩藩では7連発の銃も使われました。

大砲は、主に射程距離約1kmのものが使われました。ただし、新政府軍側の肥前藩（佐賀県）は、射程距離3km以上というアームストロング砲を数門もっていました。

（太田典孝）



飯山戦争の図（部分）（『北信輝土叢書』第9巻より転載）



北越戦争図（部分）（長野県立歴史館蔵 斎藤泉文書）  
信州11藩は、飯山戦争のあと、長岡城攻めに従軍した。炎上する長岡城と各藩の配置が記されている。



松本藩が戊辰戦争で使用した大砲（大銅金男蔵）



アームストロング砲（復元）  
（佐賀県立佐賀城本丸歴史館蔵）

# 新しい軍隊の誕生



日章旗とラッパをもった「徴兵令」が改正を宣伝している。子どもたちは捕まらないように逃げ、親は代人料の270円を差し出している。ふつうの人びとの気持ちは、徴兵拒否だったことがわかる風刺画。

団団珍聞 1879年(明治12)12月6日号

(上田市立図書館蔵)

## ◇最初の徴兵制度

諸外国のすすんだ制度や技術に追いつくため、明治政府は「富国強兵」を掲げました。武士中心だった軍隊組織を改め、1873年(明治6)1月に徴兵令を定め「国民皆兵」としました。

20歳以上の成年男子(壮丁)は必ず常備軍に入り、3年間勤務することになりました。ただし、政府の役人や家の主・長男・学生・身長五尺一寸(約155cm)未満のもの、病気のあるもの、犯罪者、高額な代人料(270円=現在の300万円程)納入者は免除されました。軍隊制度には、常備軍のほか、後備軍(常備軍のあと4年間召集義務)、国民軍(常備・後備軍以外の軍7歳~40歳)が置かれました。



徴兵令書 1875年(明治8)2月

(長野県史通史編)より転載



明治初頭の上田城の図

(長野県立歴史館蔵)

上田には、常備軍の第二分営が置かれていた。「徴兵、徴役一字流い、腰にサーベル鉄鎖」とうたわれ、徴兵は嫌われた。

### ◇徴兵制度の改革

徴兵された兵隊は、農家の次男三男が中心でした。いっぽう全体の86%の人が兵役免除になりました。農作業の人出をとられた農家を中心に、徴兵反対一揆が全国でおきました。政府は1879年（明治12）、83年と免役内容を制限し、代人料も廃止するなど制度を改めました。その結果、士族などの人びとの徴兵もすすみ、近代的な軍隊が作られました。

長野県内では、1882年（明治15）には成年男子7692人中6651人が免除され、徴兵人数は434人でした。1886年になると1万529人中免除0人（猶予2849人）、徴兵人数4944人でした。両方の年に共通しているのは、逃亡兵ヒコウヘイがいたことです。徴兵反対一揆がなかった長野県では、兵役に就かないための手段のひとつが、逃亡だったといえます。（田玉徳明）

種別	年	明治15年 (1882)	明治17年 (1884)	明治19年 (1886)
		人	人	人
荘丁総員		7,692	9,440	10,529
免役		6,651	7,161	-
猶予		78	56	2,849
徴兵総数		963	2,223	7,680
不合格		229	165	2,140
落籤		24	-	-
逃亡		276	486	596
実徴兵数		434	4,572	4,944
常備兵		349	686	406
補充兵		85	886	4,538

長野県内の徴兵のようす

(『長野県政史』第1巻より作成)

# 西南戦争と長野県民



大久保利通写真（黎明館蔵・重文）  
大久保は西南戦争で政府を指導して西郷を討った。二人は幼なじみでもあり共に協力しあって徳川幕府を倒した。しかし、政治のあり方で意見が異なり、対立することになった。

左はキヨソネの描いた西郷隆盛（黎明館蔵）  
右は大分県日田の平野五岳の描いた西郷隆盛（川津信雄蔵）

キヨソネは西郷を見たことはなく、近戦者を参考にして描いた。上下は最近大分県で発見された肖像画で、平野五岳が描いた。果たして五岳は西郷に会ったことがあるのか論争中である。西郷は国民的英雄で、その人格は多くの人々に慕われた。日清戦争までは、子どもが戦争ごっこをするとき、西郷になりたがったという。



西南戦争の始まりを告げる電報（長野県立歴史館蔵）  
京都の行在所から長野県へ送信した電報で西南戦争の始まりを告げている。岐阜局へ打電され、飛脚便で長野へ届けられた。長野へ電信が架設されるのは西南戦争の翌年。

## ◇西南戦争までの時代背景

明治新政府が新しい改革をつぎつぎに進めると、はじめは新しい世に大きな期待を抱いた農民も、武士の特権を奪われた士族たちも、大きな不満をもつようになりました。そのため農民一揆・士族の反乱・自由民権運動などが起こりました。

士族の反乱の中でも最大のものが1877年（明治10）に西郷隆盛に率いられた鹿児島士族の反乱（西南戦争）でした。

政府を指導する大久保利通は、「今度の反乱は、今までの反乱と比べものにならないくらいに大きい。もしかすると、朝廷は一度、瓦解してしまうかもしれない」と伊藤博文に手紙を送っています。

政府軍は、徴兵された農民兵が中心で、はじめての戦争だったために、鹿児島士族軍の前に、大変な苦戦をしました。



段山の戦い

(熊本市立博物館提供)

熊本城の一部にある段山での激戦。西南戦争のことを描いたものには錦絵が多い。実写のようなこの絵は非常に貴重なものである。

### ◇西南戦争と長野県

西南戦争に参加した長野県の兵隊の数は不明ですが、168名の戦病死者がいたことから、およそ1000人ほどが参加したのではないかと思います。

上田の（うへだ）小菅庄作は、1875年（明治8）ごろに徴兵され、この戦争に参加しました。熊本城とその北部を攻めていた鹿児島兵の後ろを衝くため、庄作の隊は熊本県八代に上陸しました。

彼は西南戦争に参加して帰郷するまでを、克明に日記につけました。熊本・宮崎・鹿児島を15回の戦闘を重ねながら転戦しました。戦争は9月に終わりました。庄作は鹿児島から帰る船上でコレラにかかり、何ヶ月も闘病生活を送った後、無事故郷へ帰ってきました。

(本多得爾)



当時の内務省の暗号（長野県立歴史館蔵）

政府は電報で各県や軍隊に打電するときは、暗号を使った。暗号は20種類以上にものぼった。電報は情報を速く伝え、その手段のない鹿児島軍は、情報戦でも劣勢に立たされた。



晩年の小菅庄作と『鹿児島賊征討日記』

(上田市丸山啓二蔵)

庄作は西南戦争後、除隊し、上田市芳田の丸山家に婿入りし、1939年（昭和14）86歳で天寿を全うした。



# 日清・日露戦争と県民



戦利品配布の調査と配布先を記した県の書類



(長野県立歴史館蔵)

日清戦争が終わると、国は、児童や一般人の志気を奮い立たせ、同時に知識の開発と戦勝記念のために、戦利品（鉄砲・砲弾・刀・槍・被服類など）を全国に配布した。長野県には1053点が配布された。県は地域のバランスを考えながら学校・神社・寺に配布した。



戦死者の顕彰碑（小県郡武石村）

戦死した兵士は、国から勲章や位階が与えられた。家族により、墓とは別に碑が建てられることもあった。こうして、日本国民としての意識が形づくられていった。

## ◇8割以上が病死した日清戦争

明治時代の前半、日本と清（中国）は朝鮮の支配をめぐる対立しました。

朝鮮に保護権をもつ清に対して、日本は国の独立と安全のため、朝鮮の指導と管理が必要と主張しました。

1894年（明治27）、朝鮮の農民蜂起をきっかけに両国は朝鮮に兵を出し、翌年まで戦争になりました。

戦争に勝った日本は、朝鮮の指導権を手に入れ、清からは台湾などの領土と莫大な賠償金（ばいしょうきん）を得ました。

この戦争に、長野県からは約4000名の兵士が従軍し、約11%が亡くなりました。死者の83.1%は病死でした。

戦後領土となった台湾にも、現地の抵抗をおさえるため兵が派遣されました。気候や生活条件が異なる地での戦いは、病死という形で多くの兵士の命を奪いました。



日露戦争戦勝記念の仮装行列（木曾福島町）  
（長野県政史写真資料 長野県立歴史館蔵）

### ◇兵力・戦費が底をついた日露戦争

東アジアへの進出をねらうロシアは、20世紀になって、満州（中国東北部）に軍隊を駐留させました。それは日本の独立と日本の朝鮮（大韓帝国）支配に大きな脅威となっていました。

両国の交渉が進まない中、新聞などが対ロシア強硬論を主張し、政府や国民の多くは戦争に傾いていきました。

1904年（明治37）戦争が始まると、日本はイギリスやアメリカの協力を得て戦いを進め、兵力と国力を使い果たしながらも、翌年軍事上の勝利を固めました。そこで、アメリカの仲介により、難しい交渉の末に講和を成立させました。

犠牲は大きく、長野県からは2万8450人が従軍し、2278人が戦死しました。

戦後、日本は工業化が急速に進み、世界の強国に数えられるようになり、長野県では製糸業が大発展しました。

（児玉卓文）

日露戦争の勝利に、全国各地でさまざまなお祝いがおこなわれた。

しかし、国力不足を知らない人々は、賠償金を取れない講和条約の内容を知ると、講和に反対した。県内でも上田・松本・中野などで講和反対の集會が開かれました。



日露戦争戦勝記念の絵葉書  
（長野県立歴史館蔵）



忠馬の碑（望月町布施）  
県内からは2267頭の馬が、騎兵用や輸送用になり出された。別れや死をいたみ、飼い主の農民や運送業者の中には、馬頭観音などの石碑を建てて供養する者もいた。

# 日中戦争から太平洋戦争へ



松本市内を行進する兵士たち (須坂市 小山和夫提供)  
1937年(昭和12)、松本にあった陸軍歩兵第五十連隊の兵士たちも出兵した。

## ◇満州事変から日中十五年戦争へ

1931年(昭和6)の満州事変をきっかけに、太平洋戦争が終わる1945年(昭和20)まで、日本は長い戦争(十五年戦争)に突入しました。

この戦争の間、長野県からもたくさんの兵士が出征しました。

人口6500人程だった東筑摩郡波田村(波田町)からは、835人が出征しました。そのうちの3割近い238人が戦死しました。十五年戦争での長野県全体の動員数は23万4000人程、戦没者は5万3000人程とされています。

また、満州への移民が奨励され、3万人を超える県民が大陸に渡りました。このうち半数近い1万5000人が犠牲となっています。県下の戦争犠牲者の合計は7万人近くのにのぼります。

## 十五年戦争における長野県の戦死者等の数

郡市	戦没者	満州開拓犠牲者	郡市	戦没者	満州開拓犠牲者
南佐久	1,707	879	松本市	3,089	455
北佐久	1,739	417	上田市	1,561	266
小  畢	3,101	857	岡谷市	794	142
諏  訪	1,098	650	諏谷市	1,813	1,216
上 伊 那	3,000	908	諏訪市	970	191
下 伊 那	3,797	2,182	須坂市	1,233	190
木  曾	1,680	934	小  諸 市	1,049	178
東 筑 摩	2,217	686	伊  那 市	1,122	307
南 安 曇	2,196	479	駒ヶ嶺市	777	219
北 安 曇	1,250	338	中  野 市	980	180
更  根	1,226	290	大  町 市	573	147
埴  科	1,762	461	飯  山市	1,174	543
上 高 井	732	243	茅  野 市	1,023	244
下 高 井	896	615	塩  尻 市	815	274
上 水 内	2,626	578	更  埴 市	967	223
下 水 内	398	64	佐  久 市	1,788	481
長  野 市	3,989	610	計	53,140	16,447

(『長野県史通史編第9巻近代3』より作成)



女子の竹槍訓練 (岡谷市立蚕糸博物館提供)  
 “本土決戦”に備えて、女性たちが竹槍による訓練をおこなった。



婦人防火軍装 (長野県立歴史館蔵)  
 上田市と上田市消防団が作成した、「家庭防  
 火の心得」に掲載されたもの。

### ◇太平洋戦争下の県民生活

1941年(昭和16)太平洋戦争の戦端を開いた真珠湾攻撃の大勝利に、長野県民も熱狂しました。このときの感激を「…うれしいやら驚くやらたとへやうもなく、…日本万歳、天皇陛下万歳を心で叫んで、12月8日は一生忘れまいと思った」などと記した子どもたちが大勢いました。

しかし、戦争が長引くにつれ、生活は苦しくなり、食べるものも着るものも制限されるようになりました。トチなどの木の実やユリヤクズなどの植物の根はもちろん、犬の肉も食料となりました。金属類の回収もおこなわれ、お寺の梵鐘も供出されました。

学校では軍事教練がおこなわれたばかりでなく、勤労働員といって授業の代わりに農場や工場で働かされるまでになりました。女子生徒までもが軍事工場<sup>軍需工場</sup>で働かされたのです。長野県は空襲に苦しむ大都市からの疎開がおこなわれましたが、最後は長野県も空襲を受けました。(中條昭雄)



衣料切符 (長野県立歴史館蔵)  
 衣料だけでなく、生活必需品全般が配給制となり、自由な売買はできなくなった。



空襲を受けた長野駅 (『長野市のあゆみ』より転載)  
 終戦を迎える前々日、1945年(昭和20)8月13日に長野市は空襲を受けた。

# 満州開拓団



満州開拓団絵葉書 (長野県立歴史館蔵)



長野県開拓自興会寄贈資料 (長野県立歴史館蔵)



開拓者の手記と開拓のようすをまとめた書籍 (長野県立歴史館蔵)



長野県地方計画参考図 (長野県立歴史館蔵)  
1つの点が一人。1941年(昭和16)までの各市町村の満州移民の数がわかる。

## ◇満州での暮らし

1932年(昭和7)から1945年(昭和20)にかけて、長野県は満州(中国東北区)におよそ3万3000人の移民を送りました。全国で一番多い移民送出県でした。満州を開拓し、日本に食料などを送るのが目的でした。満州の気候や土地にあった農作物の作り方などを事前に勉強しました。はじめは順調でしたが、戦争の状況が厳しくなると、働き手が兵隊に行ってしまうなどの理由で農作物が思うように生産できませんでした。

## ◇敗戦と帰国

1945年8月8日、ソビエト連邦が満州に攻め込んできました。開拓団の人びとは逃げ出しました。捕まった人もいますし、自決をした人もいます。親と離ればなれになった子どももいました。戦争が終わり、多くの人びとが命



海外同胞帰還促進家族の旗  
 (長野県立歴史館蔵)  
 未帰還者の帰国を促進するために1957年(昭和32)に全国大会が開かれた。



満州開拓のようすを語り継ぐ人びと (阿南高校提供)

からがら海を渡り帰国しました。日本にもどってきても食べるものや住む場所がなく困りました。

#### ◇慰霊の旅

中国との国交が回復し、中国残留孤児と呼ばれる人たちが来日して肉親探しをする動きが出てきました。再会できる人もいましたが、手がかりを見つけられず中国にもどる人もいました。

近年、満州開拓のようすを語ったり、記録に残そうとする動きがあります。亡くなった人びとの慰霊碑を建てる場合もあります。中国を訪問した人たちもいます。開拓団や青少年義勇軍でおよそ1万5000人もの犠牲者を出しました。

(田村栄作)



中国での開拓慰霊碑建立のようす  
 (『長野県開拓自興会2000年記念誌』より転載)



中国から持ち帰った日の丸 (長野県開拓自興会提供)  
 慰霊の旅をしていた時に手渡されたという日の丸。集団自決をした人びとの遺品。

## 戦時下の報道



「信濃民報」 (長野県立歴史館蔵)  
松本で発刊された新聞である。1904年(明治37)に始まった日露戦争のようすを伝えている。



戦争の号外 (長野県立歴史館蔵)  
戦争のようすを伝えるために多くの号外が出された。



大太平洋戦争の新聞記事 (長野県立歴史館蔵)  
大本営は軍全体を指揮する最高機関だった。そこが情報をにぎっていて、いかにも大きな戦果があがっているように国民には知らせていた。

### ○戦争はどう伝えられたか

近代の戦争は、どのように人びとに伝えられたのでしょうか。

日清・日露戦争のときは、新聞による報道が中心でした。戦意を高める記事が紙面をうめました。戦争報道が盛んになると、長野や松本などでは、新聞社間の競争が激しくなりました。県内の日刊紙発行部数の半分を占めていた信濃毎日新聞は、日露戦争の間254回の号外を出しました。

昭和になってからの戦争は、ラジオ放送でも伝えられることになりました。多くの人がより身近に情報をえることができることになりました。しかし、国が情報を管理していたので、正確な戦争のようすは知ることはできませんでした。

関東防空大演習を唾う(一部)  
 帝都の上空に於て、敵機を迎へ撃つ如き、作戦計画は、最初からこれを予定するならば、滑稽であり、やむを得ずして、これを行ふならば、勝敗の運命を決すべき最終の戦争を想定するものであらねばならない。壮観は壮観なりと雖も、要するにそれは一のパベット・シヨールに過ぎない。特にそれが夜襲であるならば、消燈しこれに備ふるが如きは、却つて、人をして狼狽せしむるのみである。科学の進歩は、之を滑稽化さねばやまないだつ。

関東防空大演習を唾う

(「信濃毎日新聞」(1933年8月11日)の社説より)  
 「唾う」には「あざけり笑う」という意味がこめられている。

#### ◇ジャーナリストたちの動き

戦争に対して批判的な報道ができない状況に、抵抗するジャーナリストたちもいました。

信濃毎日新聞の主筆をつとめていた桐生悠々は、1933年(昭和8)の社説で「関東防空大演習を唾う」という題で社説を書き、東京上空での防空演習の想定を批判しました。軍人団体などの反発を招き新聞社をやめることになりました。

穂高町出身の清沢洌は、朝日新聞などで活躍しました。戦争に対する国の方針を批判したとして、新聞・雑誌への寄稿を禁止されました。終戦直前の1945年5月に亡くなるまで日記を書きつづけ、敗戦を予想して戦争の無意味さを書きのこしました。のちに日記は、「暗黒日記」として刊行されました。

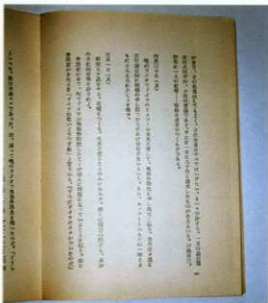
(市川包雄)



桐生悠々の著作「畜生道の地球」(長野県立歴史館蔵)  
 長野県を去ったあとは、名古屋で個人雑誌「他山の石」を出して言論活動をおこなった。



「暗黒日記」(県立長野図書館蔵)



「暗黒日記」の一部

(県立長野図書館蔵)



# 戦後改革と反戦の誓い



長野県の自小作別農家戸数変化  
 (『絵でみるたのしい長野県の歴史』より転載)



男子も慣れない手つきで裁縫（裁縫）（阿智村教育委員会提供）  
 六・三制が実施されると、学習内容も大きく変わり、男子にも家庭科が課せられた。



戦後初の総選挙（総選挙）（長野県政史写真資料）  
 1946年4月に20歳以上の男女による普通選挙がおこなわれた。長野県では女性の安藤はつがトップ当選した。

## ◇民主化への道

戦後の長野県の人びとは、きびしい生活をおくっていましたが、新しい民主的な社会を作ろうとする動きも県下各地で活発になってきました。

占領軍は日本の民主化を進める政策の一つとして、地主制の解体を命じ、地主から小作人を解放する農地改革がおこなわれました。長野県では自作農家が戦前の2倍へと急増しました。農民の生産意欲は高まり、食料の増産につながりました。

また、教育基本法や学校教育法が制定され、小学校・中学校の9年間で義務教育となりました。六・三・三・四制の教育が始まり、教室や教材、学用品等も不足していましたが、お互い工夫したり、都合をつけたりしながら民主教育に向けてスタートがきられました。

1945年に選挙法が改正されて、女性も選挙権をもつようになりました。知事も官選から公選となり、1947年には初めての知事選がおこなわれ、長野県は社会党の林虎雄が当選しました。

## ◇反戦への誓い

日本国憲法の前文には、平和の誓いが書かれています。それは戦争を反省し、二度と戦争をしないと固い決意にもとづいたものです。原子爆弾の被害を再びくり返さないために「核兵器を持たない、作らない、持ちこませない」（非核三原則）ことを決めています。

また、日本は唯一の被爆国として、永久の平和を実現するために、世界の先頭に立って核兵器廃絶運動に取り組んでいます。

1955年10月に原水爆禁止長野県協議会が結成され、原水爆禁止と平和運動が本格的に始められました。長野県議会でも原水爆実験中止を決議し、戦争と平和に関する決議・意見書をアメリカ・ソビエト連邦・イギリスに提出しています。

## ◇平和運動

朝鮮戦争の勃発により、米軍は山岳戦に備えて演習地を必要としました。浅間山麓5000町歩を山岳戦の演習地用に使用したいという申し入れがありましたが、全県的な反対運動で阻止しました。

このように県下各地の民間や各種団体は、戦争や核兵器の恐ろしさを次世代に伝えていく運動に幅広く取り組んでいます。

(春原邦江)



「平和の塔」前で献花 (信濃毎日新聞社提供)  
伊那市の円山公園では毎年8月6日に、原爆被害者への慰霊をおこなっている。



米軍演習地反対デモ 1953年 (長野県政史写真資料)  
国際的な観光地・避暑地として有名になった軽井沢の自然と平和を守れという声は、市民の声となり、さらに全県民を動かす大運動となった。



「不戦の像」 (南相木村提供)  
戦没者に対する鎮魂と平和への誓いのために建立された。

# 長野県の戦争遺跡マップ



- 1 日本焼結工場跡 (信濃町)
- 2 十三崖地下壕跡 (中野市)
- 3 鎌田山地下壕跡 (須坂市)
- 4 長野飛行場跡 (長野市)
- 5 小市海軍壕跡 (長野市)
- 6 松代大本営予定地関連施設跡 (長野市)
- 7 仁古田地下工場跡 (上田市)
- 8 軍需物資隠匿洞穴跡 (小諸市・御代田町)
- 9 旧陸軍笹部飛行場跡 (松本市)
- 10 松本市疎開工場群跡 (松本市)
- 11 松本歩兵第五十連隊兵舎跡 (松本市)
- 12 有明演習地跡 (穂高町)
- 13 上田飛行場跡 (上田市)
- 14 旧諏訪鉄山跡 (茅野市)
- 15 岡谷防空監視哨跡 (岡谷市)
- 16 陸軍伊那飛行場跡 (伊那市)
- 17 陸軍第9研究所疎開地跡 (駒ヶ根市)
- 18 平岡ダム・東京捕虜収容所  
瀧島分別跡 (天電村)

長野県の主な戦争遺跡

## ◇近代の戦争

近代以降、戦車・航空機・潜水艦・毒ガス・原子爆弾などの兵器が発明され、戦争での破壊力は飛躍的に増大しました。対外戦争では、国の総力をあげて戦うようになりました。国民は近代以前のように、戦争に対して傍観者的な立場を取ることには許されませんでした。近代の戦争では、科学、技術、資源、労力といったあらゆるものが動員されました。

### ◇長野県の戦争遺跡

このような近代の戦争にかかわる遺跡（戦争遺跡）が、国内外に残っています。昭和の時代に勃発した日中戦争と太平洋戦争は、それまでの近代の戦争（日清、日露戦争など）に比べて、はるかに大規模なものでした。とくに太平洋戦争では、日本国内が戦場となりました。そのため長野県内にも多くの戦争の施設が造られました。

代表的な長野県の戦争遺跡としては、松代の大本営予定地、松本歩兵連隊兵舎、松本、上田などの軍需工場、その他捕虜収容所、戦闘地、埋葬地などがあります。

### ◇松代大本営予定地

大本営予定地跡は戦局が悪化した太平洋戦争末期に、松代に建設された巨大地下壕です。東京にあった大本営（軍部の最高機関）や天皇、皇族、政府機関、日本放送協会、印刷局、通信施設など国家の中枢機関をすべて移転させるために掘られました。建設の目的や規模からみて日本有数の戦争遺跡といえるでしょう。

松代の地下壕や平岡ダムの建設工事には、朝鮮や中国の労働者が動員されました。難工事というだけでなく、劣悪な生活環境の中で、多くの死傷者が出たとされています。

（川崎保）



中野市十三崖地下壕跡



長野市松代大本営予定地跡

（西条秀夫提供）



松本歩兵第五十連隊兵舎跡

# 平和学習の取り組み



沖縄戦体験者のお話を聞く、小諸東中学校2年生。  
(小諸東中学校提供)



修学旅行で広島にやってきた長野市立三陽中学校の生徒たち。原爆ドームを背景にして。  
(三陽中学校提供)



広島で被爆した詩人峠三吉の詩碑と共に。詩碑は平和公園の中にある。  
(三陽中学校提供)

## ◇中学生の取り組み

長野県内の中学校・高校を中心とした各学校では、平和学習の取り組みがたくさんおこなわれてきました。

戦争の記憶が薄れる中、戦争体験者のお話を直接聞くことはとても大切なことです。ある中学校では総合的な学習の時間を利用して、太平洋戦争時の沖縄戦を体験した方の講演を聞きました。

また県内のいくつかの中学校や高校では、修学旅行で広島へ行っています。ある中学校では、半年間、広島原爆についてテーマを決め事前学習をし、「原爆の絵」を描いたり、広島平和記念公園にある石碑について調べたりしました。

実際に広島を訪れた生徒たちは、「戦争は人間の尊厳を損なう最たるもの」という思いをあらたにしたようです。



元広島平和記念館長高橋先生の講演を聞き、お礼として合唱曲「消えた八月」を披露した。

## ◇高校生の取り組み

長野市の私立・長野俊英高校の郷土研究班では、長野市松代町にある大本営予定地の地下壕の保存・公開に力を注いでいます。

そのきっかけは、1985年（昭和60）に修学旅行で行った沖縄でした。郷土研究班の生徒たちは、沖縄戦で野戦病院とされたガラビ壕を見学し、大きな衝撃を受けたのです。そして、沖縄戦の最中に地元で掘られていた地下壕の調査を始め、調査とあわせて、長野市長に地下壕の公開をうったえました。長野市も、地下壕を太平洋戦争の遺跡として多くの人に知ってもらうため整備をはじめ、1990年（平成2）に象山地下壕の保存・公開が実現したのです。全国から多くの人が見学に訪れています。

現在も郷土研究班は、地下壕周辺から発見された資料を大切に保管し、関係者から聞き取り調査をしています。また、地下壕を訪れる人びとに説明をしたり、修学旅行の他県の高校生と交流をしたりしました。県内の中学生との共同学習も試みられています。

（霜田英子）



郷土研究班で保管している資料類



学校祭での郷土研究班の発表の様子（2004年）  
床上に広げられた車の図は、「丸護車」と呼ばれる天皇専用車を描いたもの。



地下壕内で説明をする班員（長野俊英高校提供）  
依頼があれば土日など休みを利用して対応している。



修学旅行で来長した滋賀県立水口東高校との交流風景  
（長野市民新聞提供）  
水口東高校の宿舎を郷土研究班が訪ね、戦争体験者への聞き取り調査等について報告をした。  
班員が描いた太平洋戦争中の県内の軍事施設建設に従事した朝鮮人労働者3万人分のイラストに見入る水口東高校の皆さん。

## 参 考 文 献

著者・編者	文献名	発行者	発行年
北信郷土叢書刊行会	『北信郷土叢書』 巻9 「越奥戦争見聞録」	北信郷土叢書刊行会	1935年
尾崎行也・川上元・平野勝重	『長野県の歴史シリーズ③ 図説・上田の歴史』	郷土出版社	1970年
水野恭一郎	『備中赤木家文書について』『古文書学研究』 第7・8号	日本古文書学会編	1975年
信濃路	『写真に見る長野のあゆみ』市制長野市80周年記念		1977年
中村勝実	『もう一つの五稜郭』	樫	1982年
長野県歴史教育者協議会編	『僕らの街にも戦争があった—長野県の戦争遺跡—』	銀河書房	1988年
野上毅	『朝日百科 日本の歴史6 中世から近世へ』	朝日新聞社	1989年
信濃毎日新聞社	『写真記録昭和の信州』	信濃毎日新聞社	1989年
長野県	『長野県史 通史編』第9巻 近代三	長野県史刊行会	1990年
篠ノ井旭高校郷土班・土屋光男	『生徒たちのマツシロ大本営』	郷土出版社	1990年
信濃教育出版社	『絵で見るたのしい長野県の歴史』		1990年
馬の博物館編	『秋季特別展示図録 絵画にみる平家物語』		1991年
五味文彦	『武士と文士の中世史』	東京大学出版会	1992年
石井進監修	『まんが信州の歴史2 武士の世の中』	信濃毎日新聞社	1993年
松本市	『松本市史』第4巻旧市町村編1	松本市	1993年
望月町誌編纂委員会	『望月町誌』第三巻	望月町	1994年
松代大本営の保存をすすめる会編	『ガイドブック松代大本営』	新日本出版社	1995年
山本金太	『飯山戦争-明治維新、北信濃の夜明け』	ほおずき書籍	1996年
長野県立歴史館編	『信濃の風土と歴史② 原始時代のシナノ』		1996年
太丸伸章	『歴史群像名城シリーズ15 会津若松城 土城を支えた風雪の城』	学習研究社	1997年
長野県立歴史館編	『夏季企画展展示図録 古代シナノの武器と馬具』		1998年
松代藩文化施設管理事務所	『真田三代 近世大名への道』	松代藩文化施設管理事務所	2000年
半藤一利	『徹底分析 川中島合戦』	P H P 研究所	2000年
大塚初重、白石太郎、西谷正、町田章編	『考古学による日本歴史6 戦争』	雄山閣	2000年
峰岸純夫	『中世災害・戦乱の社会史』	吉川弘文館	2001年
長野県開拓自興会	『長野県開拓自興会2000年記念誌』	長野県開拓自興会	2001年
講談社総編集局	『週刊 再現日本史』戦国⑨	講談社	2002年
佐原真	『考古学つづれ草—戦争について考える—』	小学館	2002年
十菱駿武・菊池実編	『続調べる戦争遺跡の事典』	柏書房	2003年
満蒙開拓を語りつくす会	『下伊那の中の満州 聞きとり報告集1』 満蒙開拓を語りつくす会 事業準備室報告集	飯田市地域史研究事業準備室	2003年
長野県立歴史館編	『秋季企画展展示図録 中世信濃武士意外伝』		2004年
新井邦弘	『歴史群像シリーズ74 幕末大全下巻 維新日天と戊辰戦争』	学習研究社	2004年
長野県白田町	パンフレット「籠岡城五稜郭」	長野県白田町	
満蒙開拓を語りつくす会	『下伊那の中の満州 聞き書き 報告集2』 満蒙開拓を語りつくす会報告集	飯田市歴史研究所	2004年

## 協力者

愛知県埋蔵文化財センター	郷土出版社	信州大学	松代文化施設等管理事務所
愛知県教育サービスセンター	県立長野図書館	東御市教育委員会	松本市教育委員会
阿智村教育委員会	五岳顕彰会 川津信雄	独立行政法人国立科学博物館	丸山公晃
飯田市教育委員会	小松宗仁	中島庄一	丸山啓二
飯田市歴史研究所	小諸市立小諸東中学校	長野県阿南高等学校	南相木村
大飼全男	小山和夫	長野県開拓自興会	宮下喜由
上田市立図書館	財団法人馬事文化財団	中野市教育委員会	和歌山県立博物館
上田市立博物館	財団法人人間美術館	長野市	
白田町立田口小学校	佐賀県教育委員会	長野市教育委員会	
白田町教育委員会	佐賀県立佐賀城本丸歴史館	長野俊英高等学校	
大塚尚三	信濃毎日新聞社	長野市立三陽中学校	
大塚了一	鳥根県埋蔵文化財調査センター	長野市立博物館	
岡谷市立壺糸博物館	須坂市教育委員会	西条秀夫	
岡山県立博物館	大本山本能寺	原 昌義	
鹿児島県立歴史資料センター黎明館	高遠町観光協会	平野隆道	
(株) スカイワールド	千曲市教育委員会	福島邦男	
神田祥男	土屋光男	市制神社	
熊本市立博物館	東京国立博物館	堀田雄二	

## あとがき

この本を読んでもっと知りたいことが出てきたら、ぜひ県立歴史館へ来てください。収蔵している資料の閲覧ができますし、館にある書籍で詳しく調べることができます。また専門の職員がみなさんの質問にお答えをしています。

最後に本書のために、貴重な写真や資料などを快くご提供くださった多くの方々に厚くお礼申し上げます。

2005年3月

長野県立歴史館

### 編集代表

市川包雄 村石正行

### 執筆者・編集者(五十音順)

市川包雄 市川健夫 伊藤友久 太田典孝 大橋昌人 岡村秀雄 川崎 保  
郷道哲章 児玉卓文 酒井健次 霜田英子 春原邦江 田玉徳明 田村栄作  
寺島正友 中條昭雄 本多得爾 村石正行 百瀬新治



## 利用案内

- 開館時間 ●午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日 ●毎週月曜日（祝日、振替休日にあたるときは火曜日）と祝日の翌日  
●12月28日～1月3日、その他館長の定める日
- 観覧料 一般300円（200円）、高・大学生150円（100円）、小・中学生70円（50円）  
●（ ）内は団体20名以上  
●次に該当する場合は観覧料が無料となります。  
・小・中・高校生が土曜日、日曜日、国民の祝日及び振替休日に観覧するとき。  
・身体障害者手帳などの交付を受けている方と介護の方が観覧するとき。  
・県内の小・中・高校生が学校の教育活動として観覧するとき。この場合申請が必要であり、申請書類は当館ホームページでも手に入れることができます。
- 交通案内 ●しなの鉄道屋代駅から徒歩25分、屋代高校前駅から徒歩25分  
●長野電鉄屋代線東屋代駅から徒歩20分  
●長野自動車道更埴ICから車5分  
●高速道路バス停「上信越道 屋代」から徒歩3分

### 長野県立歴史館

信濃の風土と歴史⑪

## たたかう人びと

—戦争と平和—

2005年（平成17）3月24日発行

編集・発行 長野県立歴史館  
〒387-0007  
長野県千曲市大字屋代字清水260-6

電 話 026-274-2000（代）  
F A X 026-274-3996  
U R L <http://www.npmh.net>  
印 刷 第一企画株式会社

